

当館所蔵漢籍の「宋版」及び「元版」の解題②

土屋 裕 史

序

本稿は、前稿(第43号所収)に続き、国立公文書館(内閣文庫)が所蔵する漢籍のうち、中国の南宋時代(一一二七～一二七九)に刊行された「宋版」と元時代に刊行された「元版」(一二七九～一三六七)について、各書籍の概略・来歴・刊行年代等を一般の利用者にも分かり易く解説することを目的としたものである。

本稿では、各書籍が誰の手からどのような経緯で当館に所蔵されるに至ったかを、各書籍に捺されている蔵書印を基に考察を加えた。参照した資料は以下のとおり。

『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』(国立公文書館、1981年)

『新編蔵書印譜』(日本書誌学体系79、青裳堂書店、2001年)

『人と蔵書と蔵書印』(国立国会図書館、雄松堂出版、2002年)

この調査によって判明した過去の所蔵者については、【伝来】の項目に取りあげて説明を加え、各書籍の来歴を一覧できるようにした。

また、各書籍の刊行年代については、当館の漢籍目録『改訂内閣文庫漢籍分類目録』(1971年刊)を基本に置きつつ、目録が作成されて以降の研究成果を取り入れることを考慮した。そこで、研究論文や研究書等に載せる各書籍の刊行年代を、【刊行年代】の項目に取りあげ、各専門家の説を一覧できるようにした。

凡例

一 各書籍を取りあげる順序は『改訂内閣文庫漢籍分類目録』(1971年刊)に基づく。

一 表記は新字体を基本とする。

一 仮名遣いは表音式に拠った。

一 【伝来】の項目で取りあげる印記のうち、明治以降から当館(内閣文庫)に至る公印等は、その説明をここにまとめる。当館印譜とは『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』(国立公文書館、1981年)、下の数字はそのページ数をあらわす。

【紅葉山文庫】

「秘閣／図書／之章」：「紅葉山文庫」旧蔵本に捺した蔵書印。

明治維新後に捺したもので、甲・乙・丙の三種がある。明治一九年二月、内閣文庫において「日本／政府／図書」の印が用いられることとなり、この「秘閣／図書／之章」の印は廃止された。「当館印譜、三頁」

「太政官／文庫」：「太政官文庫」の蔵書印。「太政官文庫」は、官庁中央図書館として明治一七年一月に設立され、諸官庁の蔵書を収集・管理した。明治一八年に内閣文庫と改称、明治一九年二月から「日本／政府／図書」の印が用いられ

ることとなり、この「太政官／文庫」の印は廃止された。「当館印譜、一二七頁」

【昌平坂学問所】

「昌平坂／学問所」(墨)：「昌平坂学問所」の蔵書印。寛政九年(二七九七)に昌平坂学問所が開校されてから、明治維新によって昌平坂学問所が廃止されるまで用いられた。林家から移管された蔵書を含むすべての収蔵書に捺す。每表紙右上隅と每冊左上隅に捺するのが通例。昌平坂学問所が開校されて以降、新たに収蔵した書籍には、さらに每冊尾に年代印を捺す。「当館印譜、一四頁」

「大学校／図書／之印」：「大学校」の蔵書印。昌平坂学問所の蔵書は、明治元年四月に「大総督府」、同年六月に「昌平学校」、明治二年六月に「大学校」、同年十二月に「大学」と所管が改められた。「大学校」(明治二年六月～同年十二月)は文部省の前身機関。「当館印譜、一〇七頁」

「大学／蔵書」：「大学」の蔵書印。「大学」(明治二年二月～明治四年七月)は、上記「大学校」を受け継ぎ、明治四年七月に文部省となった。「当館印譜、一〇七頁」

「書籍／館印」：「書籍館」の蔵書印。「書籍館」(明治五年八月～明治七年七月)は、文部省が昌平坂学問所跡に開設した、我が国最初の公開図書館。その蔵書は「浅草文庫」を経て当館が受け継いでいる。「当館印譜、一一〇頁」

「浅草文庫」：「浅草文庫」の蔵書印。「浅草文庫」(明治七年七月～明治一四年五月)は、「書籍館」の蔵書を浅草八幡堀に移して開設した官立の公開図書館。その蔵書の大部分が、

当館に受け継がれている。「当館印譜、一一三頁」

「大日本／帝国／図書印」：「内務省図書館」の蔵書印。「内務省図書館」は、明治九年四月に図書寮を改めたもので、公文編纂・出版許可・納本・翻訳・保存等の事務を行った。この印は、明治九年八月から明治一五年六月に「図書館／文庫」印が新刻されるまで用いられ、甲・乙・丙の三種がある。「当館印譜、一五七頁」

※昌平坂学問所から「大学校」「大学」「書籍館」「浅草文庫」と受け継がれた蔵書は、明治三年の千代田文庫廃止に伴い、「内閣文庫」に移管された。

「日本／政府／図書」：「内閣文庫」の蔵書印。明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称した際に新刻したもので、昭和七年まで使用した。「当館印譜、一二七頁」

「内閣／文庫」：「内閣文庫」の蔵書印。昭和八年以降、この印を使用し、現在もこれを覆刻した印を用いる。「当館印譜、一二七頁」

一 【刊行年代】の項目で用いた資料は以下のとおり。

- 当館目録→『改訂内閣文庫漢籍分類目録』(内閣文庫、1971年刊)
- 『経籍訪古志』→洪江全善・森立之『経籍訪古志』(解題叢書所収、国書刊行会、1916年)
- 「関東現存宋元版書目」→長澤規矩也「関東現存宋元版書目」(長澤規矩也著作集、第三卷所収、汲古書院、1983年)
- 「宋元版所在目録」→阿部隆一「宋元版所在目録」(阿部隆一遺稿集、第一卷所収、汲古書院、1993年)
- 『正史宋元版の研究』→尾崎康『正史宋元版の研究』(汲古書院、1989年)

22 楽書 二〇〇巻

「日本現在宋元版解題 史部（上）」↓尾崎康「日本現在宋元版解題 史部（上）」（『斯道文庫論集』第27集、平成四年）

「日本現在宋元版解題 史部（下）」↓尾崎康「日本現在宋元版解題 史部（下）」（『斯道文庫論集』第28集、平成五年）

一八冊（宋）陳暘撰

林（大学頭）家旧蔵〔請求番号別〇六一〇〇〇二二〕『楽書』は、宋の陳暘が儒教の基本的な書籍から「音楽」に関する記述を抜き出して集大成したもの。その構成は以下のとおり。

卷一―卷九五：三礼（周礼・儀礼・礼記）・詩経・書経・春秋・易経・孝経・論語・孟子の各書籍から「音楽」に関する記述を抄録し、解説を加える。

卷九六―卷二〇〇：「楽図論」と題して、律呂（音調）の本義や楽器・楽章、五礼（祭祀・喪葬・賓客・軍旅・冠婚）の際の音楽について、挿絵を交えながら論述する。

儒教では、「社会の秩序を定め、人心を調和するもの」として「礼楽」を非常に重要視し、政治の根本原理と考え、『論語』に「礼楽興らずんば、刑罰中らず」（儀礼や音楽が盛んにならないければ、刑罰が適切でなくなる）とあるほどである。また儒教の經典として「五経」（易経・書経・詩経・礼記・春秋）が知られているが、古くは「楽経」を入れて「六経」といわれていた。しかし「楽経」は、秦の始皇帝の焚書によって滅び、後世に伝わらない。陳暘（生没年未詳）は、北宋時代の学者で、字は晋之、福州（福建省福州市）出身の人。紹聖元年（一〇九四）に「制科」（臨時に実施される官吏登用試験で、天子自ら課題を出して試験を行うもの）に合格して官職に就き、

礼部侍郎（官吏登用を掌る役所の次官）となる。六八歳で死去。崇寧二年（一一〇三）、『楽書』は皇帝に献上された。また兄の陳祥道（一〇五三―一〇九三）は、儒教の基本的な書籍から「礼」に関する記述を抜き出して集大成した『礼書』を著している。

【伝来】

「林氏伝家圖書」の印が、第一冊首にあり。

林家第四代・林榴岡の蔵書印。林榴岡（一六八一―一七五八）は、名は信充、字は士厚。林鳳岡の次男。享保八年（一七二三）に大学頭に就任し、翌九年に家督を継いだ。この印は、常に第一冊首右下部の一箇所にのみ捺するのが特徴。当館には、この印が捺された書籍二百六十余部を所蔵し、そのすべてが漢籍である。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾にあり。年代印なし。「書籍／館印」の印が、每冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

【刊行年代】

本書の第一冊の首には、以下の序文と公文書を附し、

- 「三山陳先生楽書序」（慶元六年、一一〇〇）
- 「尚書礼部牒文」（建中靖国元年、一一〇一）
- 「吏部奏劄子」「准行詔旨」
- 陳暘の「進楽書表」「楽書序」

また「楽書目録」に「迪功郎建昌軍南豊県主簿林宇冲校勘」とある。本書は、宋の慶元年間（一一九五―一二〇〇）に陳岐が、門人の林子冲に校勘させて、「礼書」と共に刊行したものである。本書では欠葉となっているが、至正七年（一三四七）の「礼楽書後序」が本来はあったことが知られ、元

時代に趙宗吉の命により、福州路儒学で重刊されたものと分かる。

●元刊（明修）…当館目録、四二二頁。

●宋槧本…『経籍訪古志』、三五頁。

●元至正刊明修本…「関東現存宋元版書目」、一三七頁。

●元至正七年福州路儒学刊（宋慶元）刊元至正七年修）明修

…「宋元版所在目録」、四六頁。

23 楽書 二〇〇巻

一二冊（宋）陳暘撰

紅葉山文庫旧蔵（請求番号経〇一五—〇〇〇一）

『楽書』及び陳暘については、前掲22『楽書』を参照。

【伝来】

「秘閣／図書／之章」（丙種）の印が、毎冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

【刊行年代】

本書は、前掲22『楽書』と同版だが、第一冊の首には、

○「三山陳先生楽書序」（慶元六年、一一〇〇）

○陳暘の「進楽書表」「楽書序」

以上のように二つの序文しかない。また、第二二冊の末尾には、

○「礼楽書後序」（末葉欠）

末葉を欠くが、至正七年（一三四七）の序文がある。

本書は、前掲22『楽書』と同版だが、「秘閣／図書／之章」の印がある

ことから分かるように、紅葉山文庫の旧蔵書。そのため本書は、前掲22

『楽書』に比較して、保存状態が非常に良好である。

●元刊（明修）…当館目録、四二二頁。

●元至正刊明修本…「関東現存宋元版書目」、一三七頁。

●元至正七年福州路儒学刊（宋慶元）刊元至正七年修）明修

…「宋元版所在目録」、四六頁。

24 大広益会玉篇 三〇巻（巻一〜五、一六〜二三欠）

三冊（梁）顧野王撰（唐）孫強校

昌平坂学問所旧蔵（請求番号別〇四九—〇〇一〇）

『大広益会玉篇』は、大中祥符六年（一一〇一—三）、梁の顧野王が撰述し、

唐の孫強が増補した『玉篇』に、宋の真宗の勅命を受けて陳彭年らが重修

を加えたもの。『玉篇』は、文字の形体や用法に説明の主眼を置いた字書。

漢の許慎が著した『説文解字』に基づき、一部から亥部までの部首によつ

て文字を配列する。『大広益会玉篇』の刊行により、顧野王の撰述した原

本『玉篇』、唐の時代に孫強が収録文字を増加させた「上元本」などは滅

びて伝わらない。

顧野王（五一九〜五八二）は、字は希馮、呉郡（江蘇省蘇州市）出身の

人。七歳で五経を読み、九歳で立派な文章を書き、成長して経史から天文・

地理・占い・文字学に精通し、絵を描くのが巧みであった。梁が滅亡する

と陳に仕え、黄門侍郎・光祿卿となった。

孫強（生没年未詳）は、富春（浙江省富陽市）出身の人。上元年間の処士（仕

えずに市井にある人物）。

陳彭年（九六一〜一〇一七）は、字は永年、諡は文僊、南城（山東省費

県）出身の人。一三歳で約一万余からなる「皇綱論」を著し、南唐の李煜

に召し出される。雍熙年間（九八四〜九八七）に進士で、兵部侍郎となる。

その学識の深さから、朝廷のあらゆる典礼に参与した。

【伝来】

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、第一冊尾、第二冊「分毫字様」の首、第三冊の巻一五末尾にあり。

※本書の冊次に乱れがあり、本来の第二冊が第三冊に、本来の第三冊が第二冊となっている。

「文政戊寅」の印が、第一冊尾、第三冊の巻一五末尾にあり。

※「文政戊寅」は、文政元年（一八一八）にあたる。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「用呂■■■／■■■勿墜」の不明印が、第三冊の巻一三末尾にあり。

「充棟之書非此■■■■」の書き入れが、第三冊の巻一五末尾にあり。

【刊行年代】

本書は、巻五までを欠くため序文等はなし。

●宋刊：当館目録、四五頁。

●宋末刊本：「関東現存宋元版書目」、一三三七頁。

●宋末刊：「宋元版所在目録」、四九頁。

25 大広益会玉篇 三〇巻（巻九末～一二、一九～二四欠）

三冊（梁）顧野王撰（唐）孫強校
昌平坂学問所旧蔵〔請求番号別〇四九—〇〇〇九〕

『大広益会玉篇』及び撰者等については、前掲24『大広益会玉篇』を参照。

【伝来】

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、毎冊尾、第一冊の巻六末尾にあり。

「文政戊寅」の印が、毎冊尾、第一冊の巻六末尾にあり。

※「文政戊寅」は、文政元年（一八一八）にあたる。

※第一冊の巻六末尾にも上記の二印があることから、昌平坂学問所に収蔵された時点では、四冊本であったと分かる。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

【刊行年代】

本書の第一冊首に別版の「大中祥符六年牒文」（半葉）を附す。

●元刊：当館目録、四六頁。

●元刊本：「関東現存宋元版書目」、一三三七頁。

●元刊：「宋元版所在目録」、五〇頁。

26 六書正譌 五巻

五冊（元）周伯琦撰（明）寶子偁編
毛利高標旧蔵〔請求番号二七八—〇〇九七〕

『六書正譌』は、文字の形体や用法に説明の主眼を置いた字書。小篆（漢

字の字体の一つ。秦の始皇帝が創らせ、天下の文字をこれに統一させた）

を見出しにあげて、その文字の構成について説明を加える。その説は、許

慎の『説文解字』に依拠するものと、自己の見解を述べたものが相半ば

している。文字の配列は、『礼部韻略』（後述33）二〇六韻に基づく。書名

の「六書」とは、漢字の構成を説明する六種類の方法で、許慎は「指事」「象

形」「形声」「会意」「転注」「仮借」をあげている。

周伯琦（二二九八～一三六九）は、字は伯温、饒州鄱陽（江西省鄱陽県）

出身の人。はじめ元王朝に仕えて南海県主簿となり、兵部侍郎にまでなった。その後、呉王と称して元王朝に反逆した張士誠に仕えることになった

が、張士誠が明王朝に滅ぼされると故郷の鄱陽に戻って一生を終えた。著書は『六書正譌』の他に『説文字原』一卷がある。

寶子偁（生没年未詳）は、字は燕雲、合肥（安徽省合肥市）出身の人。万暦年間（一五七三〜一六一九）の進士。泉州（福建省泉州市）の太守となり、湖北・湖南地方の学校を監督した。清廉で知識豊かであると賞賛され、後に福建布政史となった。

【伝来】

「佐伯侯毛利／高標字培松／蔵書画之印」の大型印が、第一冊首にあり。

豊後佐伯藩主・毛利高標の蔵書印。豊後佐伯藩は、現在の大分県佐伯市にあった二万石の小藩。毛利高標（一七五五〜一八〇一）は、字を培松、堂号を紅葉齋といい、江戸中期の代表的な蔵書家。学問を好んだ高標は、宋・元・明版や朝鮮本を主とする約四万冊の漢籍を収集し、佐伯城内に佐伯文庫を建てて蔵書を管理させた。その蔵書は、文政一一（一八二八）年、高標の孫である高翰によって、文庫本中の善本二万冊余りが幕府に献上され、紅葉山文庫・昌平坂学問所・医学館に分収された。現在、献上本の大部分を当館が所蔵する。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾にあり。年代印なし。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「読書／撃剣」の不明印が、第一・四冊首にあり。

「三養／斎秘／笈記」（白文）の不明印が、第一・四冊首にあり。

【刊行年代】

第一冊首に「至正一二年」（一三三二）の周伯琦の「自序」、第五冊尾に「至正一二年」（一三三二）の呉当の「後叙」がある。また「合肥寶子偁重編」とあることから、本書が明時代の補修本であると分かる。

●元刊（明修）：当館目録、四七頁。

●元刊明修本：「関東現存宋元版書目」、一三七頁。

●〔明前期〕刊（覆元至正一五年平江郡守高德基刊本）明修

：「宋元版所在目録」、五二頁。

27 鉅宋広韻 五卷

五冊（宋）陳彭年等奉勅撰

木村兼葭堂旧蔵〔請求番号重〇〇三—〇〇〇三〕

『広韻』は、漢字を「韻」（音の末尾の響き）によって分類整理し、発音と意義の説明を加えた字書。この体裁の字書は、隋の陸法言『切韻』にはじまり、唐の孫愐が『切韻』を増補した『唐韻』へと続く。本書は、景德四年（一〇〇七）宋の真宗の勅命により、陳彭年が中心となって孫愐の『唐韻』を大幅に増補改訂したもので、大中祥符元年（一〇〇八）に脱稿した。漢字を『切韻』に依拠して二〇六韻に分類する。

陳彭年については、前掲24『大広益会玉篇』を参照。

【伝来】

「兼葭堂／秘不許／出闔外」の印が、第一・二冊の表紙にあり。

「兼葭堂／蔵書記」の印が、每冊首にあり。

上記の二印は、木村兼葭堂の蔵書印。木村兼葭堂（一七三六〜一八〇二）は、江戸時代の本草学者、文人、蒐集家。名は孔恭、字は世肅、兼葭堂はその書齋名。大阪の北堀江で酒造業を営むかたわら、本草学・詩・書画・篆刻を学び、広く書画・書籍・標本類を収集した。兼葭堂の没後、幕府は遺族に蔵書約三千冊の献上を命じ、文化元年（一八〇四）、兼葭堂の蔵書は昌平坂学問所に収蔵された。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「文化甲子」の印が、每冊尾にあり。

※「文化甲子」は、文化元年（一八〇四）にあたる。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首、每冊尾（第二冊を除く）にあり。

昭和三年、重要文化財に指定。

【刊行年代】

「陳州司法孫愐唐韻序」の後に、「己丑建寧府黃三八郎書鋪印行」の刊記がある。「己丑」の年代を特定が問題であり、古くは「皇祐元年」（一〇四九）と考えられていた。『経籍訪古志』は「至元二六年」（一二八九）、森立之（一八〇七〜一八八五）は「紹定二年」（一二二九）とする。当館では、欠筆や宋版『初学記』（書陵部蔵）の字様と似ていることから、「乾道五年」（一一六九）とする。「建寧府」（福建省建寧市）の「黄三八郎書鋪」（書店名）から刊行されたものと分かる。

●宋〔乾道五〕刊（黄三八郎）…当館目録、五二頁。

●宋槧本…『経籍訪古志』、四二頁。

●宋己丑（乾道二年）建寧府黄三八郎書鋪刊本

…「関東現存宋元版書目」、二三八頁。

●宋乾道五年建寧府黄三八郎書鋪刊…「宋元版所在目録」、五三頁。

28 広韻 五卷（首欠）

五冊（宋）陳彭年等奉勅撰

昌平坂学問所旧蔵〔請求番号別〇四九—〇〇〇四〕

『広韻』については、前掲27『鉅宋広韻』を参照。

陳彭年については、前掲24『大広益会玉篇』を参照。

【伝来】

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「文化丁卯」の印が、每冊尾にあり。

※「文化丁卯」は、文化四年（一八〇七）にあたる。

「大学校／図書／之印」の印が、每冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「内閣／文庫」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

【刊行年代】

●宋刊（覆宋）…当館目録、五二頁。

●宋槧本…『経籍訪古志』、四二頁。

●宋覆宋刊本…「関東現存宋元版書目」、二三八頁。

●宋寧宗頃杭州刊（覆南宋前期刊本）…「宋元版所在目録」、五三頁。

29 広韻 五卷

五冊（宋）陳彭年等奉勅撰

昌平坂学問所旧蔵〔請求番号別〇五〇—〇〇〇一〕

『広韻』については、前掲27『鉅宋広韻』を参照。

陳彭年については、前掲24『大広益会玉篇』を参照。

【伝来】

「周／信」の印が、第一・二冊首にあり。

義堂周信ぎどうしゅうしんの手沢本と考えられる。義堂周信（一三二五〜一三八八）

は、南北朝時代の五山文学を代表する僧侶。字は義堂、諱は周信、

土佐高岡の人。夢窓疎石むそうそせきの法統を継ぐ。足利基氏の招きを受けて鎌

倉に下り、後進の指導にあたった。後に京都に戻り、足利義満の参

禪を指導した。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「寛政戊午」の印が、每冊尾にあり。

※「寛政戊午」は、寛政一〇年(一七九八)にあたる。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首にあり。

「■」(鼎形)の不明印が、第四冊尾にあり。

【刊行年代】

「陳州司法孫愔唐韻序」の後に、「至正丙午菊節／南山書院刊行」の刊記があることから、元時代の至正二六年(一二三六、丙午)に、南山書院(福建省建甌市にあった書店)から刊行されたものと分かる。

●元至正二六刊(南山書院)：当館目録、五二頁。

●元至正丙午刊本：『経籍訪古志』、四二頁。

●元至正二六年南山書院刊本：「関東現存宋元版書目」、一三八頁。

●元至正二六年南山書院刊：「宋元版所在目録」、五四頁。

30 大宋重修 広韻 五卷(卷一欠)

四冊(宋) 陳彭年等奉勅撰

昌平坂学問所旧蔵〔請求番号別〇四九—〇〇〇二〕

『広韻』については、前掲27『鉅宋広韻』を参照。

陳彭年については、前掲24『大広益会玉篇』を参照。

【伝来】

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「文政戊寅」の印が、每冊尾にあり。

※「文政戊寅」は、文政元年(二八一八)にあたる。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

【刊行年代】

第一冊が欠本のため刊記等は不明。

●元刊：当館目録、五二頁。

●元槧本：『経籍訪古志』、四二頁。

●宋刊本：「関東現存宋元版書目」、一三八頁。

●元刊：「宋元版所在目録」、五三頁。

31 明本正誤足註 広韻 五卷

五冊(宋) 陳彭年等奉勅撰

市橋長昭旧蔵〔請求番号別〇四九—〇〇〇一〕

『広韻』については、前掲27『鉅宋広韻』を参照。「明本正誤足註」の冠称は、

「都周辺で刊行された本によって校勘した善本」の意味をあらはす。「明本」

が明州(浙江省寧波市)で刊行された本を、「正誤」が校勘を行ったことを、

「足註」が注釈を省略していないことをいう。

陳彭年については、前掲24『大広益会玉篇』を参照。

【伝来】

「仁正侯長昭／黄雪書屋鑒／蔵図書之印」の大型印が、每冊首にあり。

仁正寺藩主・市橋長昭の蔵書印。仁正寺藩は、現在の滋賀県蒲生

郡日野町西大路にあった一万八千石の小藩。市橋長昭(一七七三—

一八一四)は、毛利高標(前掲26『六書正譌』を参照)と並び称さ

れた蔵書家。長昭は、書誌学に造詣が深く、宋版・元版の書籍を数

多く所蔵していた。

文化五年(一八〇八)、長昭は宋版元版三〇部(その内の数部が明版)を湯島聖堂に献納した。これらの献書には、すべてその最終冊末に市橋長昭の献書跋文が綴じ合われている。この跋文は「長昭謹誌」の形をとるが、文章は長昭と親交のあった佐藤一斎(江戸後期を代表する儒学者)が作成し、書は市河米庵(江戸後期を代表する能書家)の手によるもの。市橋長昭の献書三〇部のうち、二一部が当館に所蔵されており、本書はその一部である。

「昌平坂/学問所」(朱)の印が、每表紙、每冊首、每冊尾にあり。

この朱印は、大名や学者から湯島聖堂に献納された書籍のみに捺される特別なもの。この朱印を捺した書籍は、「昌平坂/学問所」(墨)の印を捺した普通書とは区別され、一般学生の閲覧を禁じて大切に保管した。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本/政府/図書」の印が、每冊首にあり。

【刊行年代】

●元刊…当館目録、五二頁。

●元槧本…『経籍訪古志』、四三頁。

●元刊本…「関東現存宋元版書目」、一三三八頁。

●元刊…「宋元版所在目録」、五三頁。

32 文場備用排字 礼部韻註 五卷

三冊 (宋) 丁度撰

昌平坂学問所旧蔵〔請求番号別〇四二一〇〇〇二〕

『礼部韻註』は、漢字を「韻」(音の末尾の響き)によって分類整理し、

当館所蔵漢籍の「宋版」及び「元版」の改題②

発音と意義の説明を加えた字書で、科挙の試験用の韻書。「文場」は、科挙の試験会場のこと。「礼部」は、科挙の試験を司る役所のこと。本書は、後述33『礼部韻略』の内容を簡便にしたものである。

丁度(九九〇〜一〇五三)は、字は公雅、諡は文簡、祥府(河南省開封市)出身の人。仁宗の時、翰林学士・端明殿学士となり、後に尚書左丞に至る。學術に精通し、『礼部韻略』の他に『集韻』を編纂した。

【伝来】

「昌平坂/学問所」(墨)の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「文化乙亥」の印が、每冊尾にあり。

※「文化乙亥」は、文化二年(一一一五)にあたる。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本/政府/図書」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

【刊行年代】

第三冊尾に「元統乙亥孟冬/呂氏会文堂刊」の木記があることから、元時代の元統三年(一三三五、乙亥)の陰曆一〇月に、「呂氏会文堂」より刊行されたことが分かる。

●元元統三刊(呂氏会文堂)…当館目録、五二頁。

●元元統三年呂氏会文堂刊本…「関東現存宋元版書目」、一三三八頁。

●元元統三年呂氏会文堂刊…「宋元版所在目録」、五六頁。

33 増修互註 礼部韻略 五卷

五冊 (宋) 丁度撰 毛晃注 毛居正増

昌平坂学問所旧蔵〔請求番号別〇四九一〇〇〇三〕

『礼部韻略』は、漢字を「韻」(音の末尾の響き)によって分類整理し、

発音と意義の説明を加えた字書で、科挙の試験を受ける者のために声韻の要点をまとめたもの。「礼部」は、科挙の試験を司る役所のこと。はじめ丁度^{ていど}が勅命によって『礼部韻略』を編纂したが、収録した字数が少なく遺漏や過誤が多かった。そのため毛晃^{もうこう}が、新たに二六五五字を増加して改訂を施し、さらに息子の毛居正^{もうきせい}が一四〇二字を加えて校勘したものが『増修互註礼部韻略』である。

丁度^{ていど}については、前掲32『礼部韻註』を参照。

毛晃^{もうこう}（生没年未詳）は、字は明敬、江山（浙江省江山市）出身の人。紹興年間（一一三一～一一六二）の進士。その当時、最も文字学に精通した学者と称された。

毛居正^{もうきせい}（生没年未詳）は、字は謹父、毛晃の息子。嘉定二六年（一二二三）、命を受けて国子監で経書の校訂に従事したが、眼病を患ったため辞めて故郷に帰った。他に『六経正誤』を編纂している。

【伝来】

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「寛政戊午」の印が、每冊尾にあり。

※「寛政戊午」は、寛政一〇年（一七九八）にあたる。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、每冊首、每冊尾にあり。

「東■」の不明印が、每冊首にあり。

また、「文明六年」に記された「积快典」の墨書が、每冊の裏表紙（第五冊を除く）見返にあり。

【刊行年代】

第一冊尾に「至正乙未仲夏／日新書堂重刊」の木記があり、元時代の至正一五年（一三五五、乙未^{いっぴ}）の陰曆五月、「日新書堂」より刊行されたも

のと考えられる。また、封面に「博文書堂」とある。「日新書堂」と「博文書堂」との関係は不明であるが、この「博文書堂」本が「日新書堂」本より後印であることは確かである。

●元至正一五刊：当館目録、五二頁。

●元至正十五年日新書堂刊本：「関東現存宋元版書目」、一三八頁。

●元至正一五年日新書堂刊：「宋元版所在目録」、五六頁。

34 古今韻会举要 三〇卷

一一〇冊（元）熊忠撰

林羅山旧蔵（請求番号別〇四九一〇〇〇八）

『古今韻会举要』は、漢字を「韻」（音の末尾の響き）によって分類整理し、発音と意義の説明を加えた字書で、黄公紹^{こうこうしやう}の『古今韻会』から要点を略挙して編修したものである。黄公紹は、南宋時代末から元時代初の学者で、字は直翁。元王朝に仕えず、著述に専念した。

熊忠^{ゆうちゆう}（生没年未詳）は、字は子中、昭武（福建省邵武市）出身の人。黄公紹の館に宿泊した際、熊忠は黄公紹の『古今韻会』を見る機会があったが、それは大部なもので世の中の学者は簡単には手にすることができないものであった。そこで熊忠は、『古今韻会』から要点のみを略挙して『古今韻会举要』を編修したという。

【伝来】

「江雲渭樹」の印が、第二冊首にあり。

「羅／山」の印が、每冊尾（第三冊を除く）にあり。

この二印は、林羅山の蔵書印。林羅山（一五八三～一六五七）は、江戸時代初期の儒学者。名は信勝または忠、字は子信、僧号を道春、

儒学者としての号を羅山という。徳川家康に仕え、学問や儀礼に関する業務に従事し、また江戸の忍岡に塾舎を建てて門人を教育した。明暦三年（一六五七）の大火で蔵書を消失したことに落胆し、四日後に病死した。

「林氏伝家図書」の印が、第一冊首にあり。

林家第四代・林榴岡の蔵書印（前掲22『楽書』を参照）。

「林氏／蔵書」の印が、毎冊首にあり。

林羅山から昌平坂学問所の開校に至るまで、林家が収集した書籍に捺した蔵書印。寛政九年（一七九七）、昌平坂学問所が開校すると林家の蔵書が移管され、その際にこの蔵書印が捺された。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、毎冊尾（第三冊を除く）にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

「嘉隠」（白文）の不明印が、毎冊首（第三・五・八・一六・一七冊を除く）にあり。

「昌／道人」の不明印が、第二・七・一一・二四・二八冊首にあり。

「劉／氏」（鼎形）の不明印が、第二・七・一一・二四・二八冊首にあり。

「■／輔」の不明印が、第七・一一・二四・二八冊首にあり。

【刊行年代】

熊忠の序文に「丁酉」とあり、これは「大徳元年」（一二二九七、丁酉）と考えられる。

●元刊…当館目録、五三頁。

●元刊本…「関東現存宋元版書目」、一三三八頁。

●元刊…「宋元版所在目録」、五七頁。

35 書学正韻 二六卷

一〇冊（元）楊桓撰

高野山釈迦文院旧蔵（請求番号別〇五〇—〇〇〇四）

『書学正韻』は、漢字を「韻」（音の末尾の響き）によって分類整理し、

発音と意義の説明を加えた字書。見出しにあげた文字について、楊桓の自

著『六書統』『六書統溯源』の説などを引用しながら、説明を加えている。

楊桓（生没年未詳）は、字は武子、号は辛泉、兗州（山東省兗州市）出

身の人。はじめ太史院校書となり、後に国子監司業となる。群書を博覧し、文字学にもつとも精通した。他に『六書統』『六書統溯源』の著作がある。

【伝来】

「釈迦文院蔵本」の印が、白紙の書帙にあり。

高野山釈迦文院の蔵書印。この蔵書印は、書籍を包む白紙の書帙にのみ捺されるのが特徴。このため書物自体には全く印記がない。釈

迦文院は長和五年（一〇一六）創建の古刹で、江戸時代には津山藩主の菩提所であった。明治一九年九月、その旧蔵の漢籍八千七百冊余りを内閣文庫が購入した。

【刊行年代】

第一〇冊末に「二年八月江浙等処儒学提举余兼補修」とある。この「二年」の特定が課題となるが、楊桓の他の著作である『六書統』『六書統溯源』の刊記等から、「至元二年」（一三三六）と考える。詳しくは、阿部隆一「日本国見在宋元版本志経部」（阿部隆一遺稿集、第一巻所収、汲古書院、1993年）の三七四・三七五頁及び三九六頁を参照。

●元刊（明印）…当館目録、五三頁。

●元刊本…「関東現存宋元版書目」、一三三八頁。

●元至大間江浙行省刊元元統間余謙修明修

…「宋元版所在目録」、五八頁。

36 漢書 一〇〇巻

二〇冊（漢）班固撰（唐）顔師古注

市野迷庵・昌平坂学問所旧蔵〔請求番号二七九—〇〇四八〕

『漢書』は、劉邦が建国した漢王朝の歴史を記述した正史。漢王朝は、劉邦が帝位に即いた紀元前二〇二年にはじまり、初始元年（八）に王莽が王位を篡奪するまで続く。『漢書』は、劉邦（高祖）から平帝まで二二代の事蹟を「紀伝体」で記述する。「前漢書」・「西漢書」（都を長安としたことになむ）ともいう。

『漢書』の体裁は、以下のとおり全一〇〇巻からなる。

本紀一二巻（歴代皇帝の事跡をしるしたもの）

表八巻（年表）

志一〇巻（暦や地理に関する記述などを集めたもの）

列伝七〇巻（個人の伝記を集めたもの）

班固（三二—九二）は、字は孟堅、右扶風安陵（陝西省咸陽市）出身の人。少年の頃より文章に通じ、後に宮中の書籍の管理や校訂に従事した。父親の遺志を継いで『漢書』の執筆を進めたが途中で獄死する。そのため妹の班昭が執筆を受け継いで完成させた。班固は辞賦に巧みで「西都賦」「東都賦」「幽通賦」があり、『文選』に収録されている。

顔師古（五八一—六四五）は、字は籀、京兆万年（陝西省西安市）出身の人。『顔氏家訓』を著した顔之推の孫で、幼少の頃より学識文才に富み、訓詁の学に通じた。唐の太宗の勅命を受け、『五経正義』を完成させた。

【伝来】

「江戸市野光／彦蔵書記」の印が、毎冊首にあり。

市野迷庵の蔵書印。市野迷庵（一七六五—一八二六）は、江戸時代

後期の儒学者。名は光彦、字は俊卿、迷庵はその号。林述斎（林家

第八代）や市河寛斎（儒学者・漢詩人）と交際し、晩年は古書の校

勘に精力を注いだという。その伝記に符合するかのようには、本書に

も詳細な校勘が加えられている。

また、第二〇冊尾に文政五年（一八二二）に市野光彦が記した跋文を附す。

「市野／光彦」（白文）、「迷／庵」の印あり。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、毎冊尾にあり。

「文政乙酉」の印が、毎冊尾にあり。

※「文政乙酉」は、文政八年（一八二五）にあたる。

「大学／蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「香山／氏」（白文）の不明印が、第四・六・七・一〇・一三・一四・一五・一七・

一八・一九・二〇冊尾にあり。

「香山章」（白文）の不明印が、第一冊首にあり。

「香章／之印」（白文）の不明印が、第三・五・一〇冊尾にあり。

「香章／之印」（小形）の不明印が、第八冊首にあり。

「煥卿／氏」の不明印が、第一冊首、第五・一〇・一六冊尾にあり。

「煥卿／氏」（白文、小形）の不明印が、第二冊尾、第八冊首にあり。

「字曰／煥卿」の不明印が、第七・九冊尾にあり。

「彦／信」（円形）の不明印が、毎冊首（第一・八・九・一〇・一一冊を

除く）にあり。

「左氏／司」の不明印が、第一〇冊首にあり。

「■」の不明印が、第一三冊尾にあり。

「■」の不明印が、第一〇冊首にあり。

【刊行年代】

「大徳八年」(一三〇四)・「大徳九年」(一三〇五)・「大徳一〇年」(一三〇六)・「元統二年」(一三三四)・「宣徳九年」(一四三四)・「宣徳一〇年」(一四三五)・「正統六年」(一四四一)・「正統八年」(一四四三)・「正徳六年」(一五一一)の補刊記あり。

●元大徳刊(明正徳修)：当館目録、五九頁。

●元槧本：『経籍訪古志』、四九頁。

●宋刊明修本：「関東現存宋元版書目」、一三三九頁。

●元大徳九年太平路儒学刊明正徳修：「宋元版所在目録」、六一頁。

●「南宋後期」刊(福清県学)元大徳八・九、至大一、延祐二、元統二、明宣徳九、正統六・八、正徳六年通修：『正史宋元版の研究』、二四二頁。

37 後漢書 九〇卷(卷一〜四、一九〜四二欠) 志三〇卷

一一冊(宋) 范曄撰(唐) 李賢注

〔志〕(晋) 司馬彪撰(梁) 劉昭注

宝勝院・昌平坂学問所旧蔵〔請求番号別〇五〇—〇〇〇九〕

『後漢書』は、劉秀(前六〜五七)が王莽を倒して再興した後漢王朝の歴史を記述した正史。後漢王朝は、劉秀が帝位に即いた建武元年(二五)にはじまり、黄初元年(二二〇)に魏の曹丕が帝位に即くまで続く。『後漢書』は、劉秀(光武帝)から献帝までの事蹟を「紀伝体」で記述する。「東漢書」(都を洛陽としたことになむ)ともいう。

『後漢書』の体裁は、以下のとおり全二二〇巻からなる。

本紀一〇巻

列伝八〇巻

志三〇巻

「本紀」及び「列伝」は范曄が撰述したものであるが、「志」は、劉昭が司馬彪『続漢書』から「志」のみを抜き出して注を加え、三〇巻にして范曄の『後漢書』を補ったものである。

范曄(二九八〜四四五)は、字は蔚宗、順陽(河南省淅川県)出身の人。はじめ尚書吏部郎となるが、後に宜城の太守に左遷された。その時に『後漢書』の執筆を始めるが、謀反を計画して誅殺されたため、「志」が未完に終わった。

司馬彪(？〜三〇六)は、字は紹統、晋の王朝の一族。軽薄な行動が多かったため父の跡を継ぐことができなかつたが、後に学問に精進し群書を博覧し、『続漢書』を著した。

劉昭(生没年未詳)は、字は宣卿、平原高唐(山東省高唐県)出身の人。老莊の学問に精通し、范曄の『後漢書』に欠けていた「志」を補った。

李賢(生没年未詳)は、字は明允、高宗の第六子。上元年間(六七四〜六七六)に太子となる。後に、則天武后によって自殺させられた。『後漢書』の注は、李賢が諸儒に命じて編纂させたもの。

【伝来】

「宝勝院」の印が、毎冊首、毎冊中、毎冊尾にあり。

京都・東福寺の塔頭「宝勝院」の蔵書印。東福寺第一七〇世の住持・斯立光幢の塔所。

「良岳院」の印が、毎冊首にあり。

京都・東福寺の塔頭「良岳院」の蔵書印。東福寺第二三八世の住持・周南円旦の塔所。本書は、「宝勝院」から法系を同じくする「良岳院」

へと伝わったと考えられ、この二つの蔵書印を捺すものは、他に宮内庁書陵部蔵『東萊先生十七史詳節』がある。

※本書の二つの蔵書印は、すべて切り取られるか削り取られ、完全な形の蔵書印は残っていない。僅かに残る印記からこの二つの蔵書印を判読した。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「文化辛未」の印が、每冊尾にあり。

※「文化辛未」は、文化八年(二八二)にあたる。

「内閣／文庫」の印が、第一〇冊首、第二〇冊尾のみにあり。

■／■の不明印が、第三冊尾、第六冊中(卷五三首)、第七冊中(卷六二尾、卷六三首)、第八冊中(卷七三尾、卷七四首)、第一一冊首、第一一冊尾にあり。

「広範」の署名が、第一一冊首(卷五首)にあり。

「広範」は、大内記藤原広範のことと考えられる。藤原広範は、文章博士藤原茂範の長男で、式部大輔に任ぜられ、乾元二年(二二〇三)に没した。金沢文庫本『本朝統文粹』の奥書にもその名が見える蔵書家である。また、弘安九年(二二八六)と年号を記す識語等がある。

【刊行年代】

- 宋刊：当館目録、六〇頁。
- 宋槧小字本：『経籍訪古志』、五一頁。
- 宋刊小字本：「関東現存宋元版書目」、一三三九頁。
- 宋刊小字本：「宋元版所在目録」、六二頁。
- 「南宋前期建」刊：「日本現在宋元版解題史部(上)」、一三七頁。

一五冊 (晋) 陳寿撰 (宋) 裴松之注
寛永寺勸学寮旧蔵〔請求番号二八〇—〇〇一六〕

『三国志』は、後漢時代(二五〇—二六五年)末期の争乱から、魏・蜀・呉の三国鼎立、そして晋による統一(二六五年)までの歴史を記述した正史。「魏志」三〇卷・「蜀志」一五卷・「呉志」二〇卷からなる。『三国志』は、魏を正統な王朝とみなすため、蜀志・呉志に本紀がない。そのため『三国志』の体裁は、以下のとおりになる。

魏志

本紀四卷

列伝二六卷

蜀志

列伝一五卷

呉志

列伝二〇卷

陳寿(二三三—二九七)は、字は承祚、巴西安漢(四川省南充市)出身の人。はじめ蜀に仕えて観閣令史となり、蜀が滅んだ後は晋に仕えて歴史書を編纂する職に就いた。

【伝来】

「淡泉」の印が、每冊首にあり。
「大司／寇章」の印が、每冊首にあり。
「凝雲深処／清暇奇観」の印が、每冊尾にあり。
「海類逸民／平泉鄭履／準凝雲楼／書画之印」の印が、每冊尾にあり。
上記の四印は、明時代の鄭暁・鄭履準の蔵書印。鄭暁(一四九九—一五六六)は、字は窒甫、海塩(浙江省海塩県)出身の人。嘉靖

三十七年(一五五八)に刑部尚書(刑罰を掌る役所の長官)となった。息子の鄭履準は、嘉靖一七年(一五三八)に生まれ、刑部郎中(刑罰を掌る役所の属官)などを歴任した。詳しくは、尾崎康「明南北国子監二十一史について」(『正史宋元版の研究』所収、汲古書院、1989年)を参照。

「武州東叡山／勸学寮文庫」(白文)の印が、毎冊首にあり。

上野寛永寺「勸学寮」の蔵書印。「勸学寮」は、了翁道覚によって寛永寺境内に設立された図書館。了翁道覚が購入した和漢の図書が収蔵された。了翁道覚(一六三〇～一七〇七)は、江戸時代前期の黄檗宗の僧侶。夢で得た薬の処方で作った「錦袋円」という薬を販売し、その利益によって大藏経の寄進など様々な事業を行った。「勸学寮」の設立もその一つ。

「大学校／図書／之印」の印が、毎冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

【刊行年代】

「嘉靖八年」(一五二九)・「嘉靖九年」(一五三〇)・「嘉靖一〇年」(一五三一)の補刊記あり。「大徳一〇年」(一三〇六)の跋文があるが、本書は「元大徳一〇年池州路学刊本」とは考えられないため問題が残る(詳しくは『正史宋元版の研究』三三三頁を参照)。

●元刊(明嘉靖修)：…当館目録、六〇頁。

●〔南宋前期〕刊(衢州)〔南宋中期・元・明中期〕・嘉靖八・九・一〇年通修 ……『正史宋元版の研究』、三三二頁。

※衢州とは、浙江省衢県のこと。

39 東萊先生標註三國志詳節 二一〇卷

当館所蔵漢籍の「宋版」及び「元版」の改題②

二冊 (宋) 呂祖謙撰
〔請求番号別〇四一—〇〇〇一〕

『三國志詳節』は、宋時代の学者である呂祖謙が、『三國志』(前掲38)の中から重要な記事を摘録したものの。「東萊先生」と冠する「正史」の摘録本は一〇種類あり、「十史」もしくは「十七史詳節」と称する。その詳細は以下のとおり(宮内庁書陵部所蔵本を参照した)。

- 『東萊先生増入正義音註 史記詳節』二〇卷
- 『參附羣書三劉互註 西漢詳節』三〇卷
- 『諸儒校正 東漢詳節』三〇卷
- 『東萊先生標註 三國志詳節』二〇卷
- 『東萊校正 晉書詳節』三〇卷
- 『東萊先生校正 南史詳節』二五卷
- 『東萊先生校正 北史詳節』二八卷
- 『東萊先生校正 隋書詳節』二〇卷
- 『諸儒校正 唐書詳節』六〇卷
- 『東萊校正 五代史詳節』一〇卷

本書は、上記のうち『東萊先生標註 三國志詳節』のみが伝わったもの。

呂祖謙(一一三七～一一八一)は、字は伯恭、東萊先生と称せられる。金華(浙江省金華市)出身の人。隆興元年(一一六三)に進士となり、太学博士・国史院編修などを歴任した。朱熹や張栻(号は南軒)、陸九淵(号は象山)といった南宋時代を代表する思想家と親交があり、朱熹と陸九淵との会合(「鵝湖の会」)の場を設けたことでも知られる。

【伝来】

「読杜／草堂」の印が、毎冊首にあり。

「天下／無双」の印が、毎冊首にあり。

記の二印は、寺田望南の蔵書印。寺田望南（生没年未詳）は、明治期の古典籍収蔵家。名は弘、盛業ともいい、望南、読杜草堂などと号した。古書の売買やその仲介で生計を立てていたというが、詳しい履歴は明かではない。

一一冊（唐）房喬等奉勅撰

室鳩巢・浅野梅堂旧蔵〔請求番号別〇四二一〇〇〇一〕

「大日本／帝国／図書印」(乙)の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

「太政官／文庫」の印が、毎冊首にあり。

「内閣／文庫」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

「■空／之印」の不明印が、毎冊首にあり。

「長宜／子孫」の不明印が、毎冊首にあり。

「沾潮／之印」の不明印が、毎冊首にあり。

また、本書は桐箱に収められているが、その蓋には「宋版三国志詳節二冊」と墨書し、蓋の裏には「箱書付／屋代弘賢先生／真蹟也」と書かれた紙が貼付されている。

【刊行年代】

宮内庁書陵部蔵『東萊先生十七史詳節』(四〇二・八一)には、「劉氏静得堂」と記す封面がある。本書は、宮内庁書陵部蔵本と同版と思われるが、本書にはその封面がない。そのため「静得堂」で印行されたものかは不明である。

●宋末元初刊：当館目録、六一頁。

●宋槧本：『経籍訪古志』、五八頁。

●宋刊本：「閩東現存宋元版書目」、二四三頁。

●元刊：「宋元版所在目録」、八八頁。

●〔元〕刊：「日本現在宋元版解題史部(下)」、二六頁。

『晋書』は、司馬炎が建国した晋王朝(西暦二六五～四一九年)の歴史を記述した正史である。晋王朝は、西晋時代と東晋時代との二つの時期に分けることができる。西晋時代(二六五～三一六)とは、初代皇帝の司馬炎が魏王朝を滅ぼした二六五年から、北方異民族の侵入により都を南方の建康(南京)に移転するまでの期間をいう。東晋時代とは、三二七年の建康への遷都から、四二〇年に劉裕(劉宋王朝の創始者)によって滅ぼされるまでの期間をいう。

東晋時代は、中国大陸の北半分を異民族(五胡十六国)、北方の五胡族の異民族が次々に一六の国を建国した)に占領されていたため、西晋時代に比べて領土は約半分ほどになっている。しかし、書道では王羲之、絵画では顧愷之、詩人では陶潜(陶淵明)が輩出するなど、芸術面での発展には著しいものがあつた。

『晋書』の編纂は、六四四年にはじまる。この年、唐の太宗は、宰相の房喬(房玄齡ともいう)以下二一人に命じ、晋王朝の歴史を著した書物のうち特に有名な一八家の書を参考にして、晋王朝の歴史を再編纂させた。「奉勅撰」とは、皇帝の勅命により編纂されたことをあらわす。『史記』『漢書』など『晋書』以前の歴史書は個人の著述によるものであつたが、この『晋書』以降、「正史」の編纂は国家によって行われるようになった。『晋書』の体裁は、以下のとおり全一三〇巻からなる。「載記」は、五胡十六国の騒乱について記したものの。

帝紀一〇巻

志二〇巻

列伝七〇巻

載記三〇巻

本書は、残念ながら散逸してしまった部分があり、現在残っているものは、巻三二～巻七二までとなる。巻三二は「列伝一」、巻七一は「列伝四一」にあたり、列伝七〇巻の内のほぼ半分が伝わっていることになる。

房喬(五七八～六四八)は、字は玄齡、齊州臨淄(山東省臨淄区)出身の人。一八歳で進士に及第し、後に唐王朝の皇帝となる李世民に仕え、その創業を助けた。李世民の即位後は、宰相として約一五年政治を執り、杜如海や魏徵らと「貞観の治」を導いた。

【伝来】

「師礼／氏」の印が、毎冊首にあり。

室鳩巢の蔵書印。室鳩巢(一六五八～一七三四)は、江戸中期の儒学者。名は直清、字は師礼、鳩巢はその号。新井白石の推挙により幕府に仕え、徳川吉宗の侍講となった。

「浅野源氏／五万巻楼／図書之記」の印が、毎冊首にあり。

「榎堂蔵書」の印が、毎冊首にあり。*「榎」は「梅」と同字。

「銭長祚／珍賞印」の印が、第六冊首にあり。

「漱芳／閣／清賞」の印が、第八冊尾にあり。

「形函／翠蘊」の印が、第八冊尾にあり。

上記の五印は、浅野梅堂の蔵書印。浅野梅堂(一八一六～一八八〇)は、幕末の幕臣、画家、蔵書家。名は長祚、字は胤卿、梅堂はその号。三千五百石の旗本で、浦賀奉行・京都町奉行・江戸町奉行を歴任した。祖父の長富、父の長泰も蔵書家として知られ、梅堂の蔵書は五万巻にも及ぶといわれた。

「読杜／草堂」の印が、每表紙(題簽)、毎冊首(第一〇冊を除く)、第一・

一一冊尾にあり。

「天下／無双」の印が、毎冊首、第一・二冊尾にあり。

「寺田／盛業」の印が、毎冊首、第一・二冊尾にあり。

「字士弘／号望南」の印が、毎冊首、第一・二冊尾にあり。

上記の四印は、寺田望南の蔵書印。寺田望南については、前掲39『三
国志詳節』を参照。

「向黄邨／珍蔵印」の印が、毎冊首にあり。

向山黄村の蔵書印。向山黄村(一八二六～一八九七)は、幕末の幕臣、明治の漢詩人。名は栄、号は黄村。外国奉行・幕府駐仏公使等を歴任し、維新後は徳川慶喜に従って静岡に赴き、藩校の興隆に努めた。

「大日本／帝国／図書印」(乙種)の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

「太政官／文庫」の印が、毎冊首にあり。

「内閣文庫」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

「■風／青■」の不明印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

以上のように、本書には数多くの蔵書印が捺されているが、これらを整理し、その伝来を辿ってみると以下のようなことになる。

① 室鳩巢(一六五八～一七三四)、江戸中期の儒学者。

② 新見政路(一七九一～一八四八)、江戸後期の幕臣。字は義卿、号は賜蘆。蔵書家として知られ、邸内に「賜蘆文庫」を設けた。

本書には、新見政路の蔵書印はない。しかし、その蔵書目録『賜蘆書院儲蔵志』に「晋書残本四十一卷十一冊」「南宋刊本」「每巻首尾二室直清ノ蔵書印アリ」とあり、本書が新見政路の「賜蘆文庫」に収蔵されていたことが分かる。

③ 浅野梅堂(一八一六～一八八〇)、幕末の幕臣、画家、蔵書家。

*明治の初年、宋元板旧刻本等を一括して百円で売却したこ

とが、反町茂雄編『紙魚の昔がたり』（昭和五三年刊、一一頁）に記されている。

④寺田望南（生没年未詳）、明治期の古典籍収集家。

⑤向山黄村（一八二六～一八九七）、幕末の幕臣、明治の漢詩人。

また、本書は桐箱に収められているが、その箱書に「天保辛丑初冬購之」とあり、天保二年（一八四一、辛丑）の冬に購入されたものであることが分かる。

【刊行年代】

●宋刊（元印）…当館目録、六一頁。

●宋槧本…『経籍訪古志』、五二頁。

●宋刊配元刊本…「関東現存宋元版書目」、二四〇頁。

●宋刊配元刊本…「宋元版所在目録」、六四頁。

●元覆南宋中期建刊本〔元〕修…『正史宋元版の研究』、三五六頁。

41 晋書 一三〇巻 音義三巻

三三〇冊（唐）房喬等奉勅撰 何超音義

寛永寺勸学寮旧蔵〔請求番号二八〇—〇〇二八〕

『晋書』については、前掲40『晋書』を参照。

「音義三巻」とは『晋書音義』のこと。『晋書音義』は、唐の何超（生没年未詳、字は令升）が『晋書』中の難読字について注を加えたもので、本書では『晋書』一三〇巻の後に『晋書音義』三巻が附されている。

【伝来】

「淡泉」の印が、毎冊首にあり。

「大司／寇章」の印が、毎冊首にあり。

「凝雲深処／清暇奇觀」の印が、毎冊尾にあり。

「海類逸民／平泉鄭履／準凝雲樓／書画之印」の印が、毎冊尾にあり。

上記の四印は、明時代の鄭曉・鄭履準の蔵書印（前掲38『三国志』を参照）。また第一・二冊尾に、鄭曉のものと思われる嘉靖四四年（一五六五）の識語がある。

「武州東叡山／勸学寮文庫」（白文）の印が、毎冊首にあり。

上野寛永寺「勸学寮」の蔵書印（前掲38『三国志』を参照）。

「大学校／図書／之印」の印が、毎冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

【刊行年代】

「正徳一〇年」（一五一五）・「嘉靖二年」（一五二三）・「嘉靖九年」（一五三〇）・「嘉靖一〇年」（一五三二）の補刊記あり。

●元刊（明嘉靖一〇修）…当館目録、六一頁。

●元刊元大徳九路本（集慶路）明嘉靖一〇年修

…「宋元版所在目録」、六四頁。

※大徳九路本とは、大徳九年（二三〇五）頃、九つの路（行政区分）にある学校に命

じて作らせた史記から五代史記までの一〇史をいいます。

●元浙刊本明正徳一〇、嘉靖二・九・一〇年通修

…『正史宋元版の研究』、三七二頁。

※元時代に杭州（浙江省）周辺で刊行されたものを、正徳一〇年・嘉靖二年・嘉靖九年・嘉靖一〇年に補刻したもの。「通修」とは、補刻を二度以上重ねた刊本。上記の「大徳九路本」とは異なる版本。

42 晋書 一三〇巻 音義三巻（巻一～一〇、一一～一三〇補写）

四二冊（唐）房喬等奉勅撰 何超音義

昌平坂学問所旧蔵〔請求番号二八〇—〇〇三〇〕

三四冊（唐）房喬等奉勅撰 何超音義

増島蘭園・昌平坂学問所旧蔵〔請求番号二八〇—〇〇二七〕

『晋書』については、前掲40『晋書』を参照。

『音義』については、前掲41『晋書』を参照。

【伝来】

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「天保壬辰」の印が、每冊尾（補写部分を除く）にあり。

※「天保壬辰」は、天保三年（一八三二）にあたる。

「梧月楼弄」の印が、每表紙（第一冊／第四冊を除く）にあり。

林家第一一代・林復齋の蔵書印。林復齋（一八〇〇—一八五九）は、

名は鱈、字は弼中、復齋はその号。林述齋（林家第八代）の四男。

嘉永六年（一八五三）家督を継いだ。浦賀・神奈川・横浜において、

米国使節ペリーとの外交交渉を担当し、「日米和親条約」締結に貢

献した。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

【刊行年代】

補刊記は、前掲41『晋書』と同じ。本書には多くの欠落部分があるが、

その欠落部分すべてを書写で補っている。

●元刊（明嘉靖一〇修）…当館目録、六一頁。

●元刊元大徳九路本（集慶路）明嘉靖一〇年修

…「宋元版所在目録」、六四頁。

●元浙刊本明正徳一〇、嘉靖二・九・一〇年通修

…『正史宋元版の研究』、三七三頁。

43 晋書 一三〇卷 音義三卷

当館所蔵漢籍の「宋版」及び「元版」の改題②

『晋書』については、前掲40『晋書』を参照。

『音義』については、前掲41『晋書』を参照。

【伝来】

「増島氏／函書記」の印が、每冊首、第一〇冊表紙にあり。

増島蘭園の蔵書印。増島蘭園（一七六九—一八三九）は、江戸後期

の儒学者・本草学者。名は信行、字は孟鞏、蘭園はその号。寛政

七年（一七九五）、御書物奉行に任ぜられ、文化十一年（一八二四）

には御儒者となる。儒学や本草学に関する著作がある。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙、每冊尾にあり。

「文政辛巳」の印が、每冊尾にあり。

※「文政辛巳」は、文政四年（一八二二）にあたる。

「大学／蔵書」の印が、每冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあり。

「大日本／帝国／函書印」（乙種）の印が、每冊首にあり。

「竹蔭書屋」の不明印が、第五・六・三・二・三三冊表紙にあり。

【刊行年代】

前掲41・42『晋書』の補刊記に、さらに「嘉靖三十七年」（一五五八）が

加わることから、前掲書より時代の下ったものと考えられる。

●元刊（明嘉靖三七修）…当館目録、六一頁。

●元刊元大徳九路本（集慶路）明嘉靖三十七年修

…「宋元版所在目録」、六四頁。

●元浙刊本至嘉靖三十七年通修…『正史宋元版の研究』、三七三頁。

44 晋書 一三〇巻 音義三巻

四〇冊 (唐) 房喬等奉勅撰 何超音義
林 (大学頭) 家旧蔵〔請求番号二八〇—〇〇二六〕

『晋書』については、前掲40『晋書』を参照。
『音義』については、前掲41『晋書』を参照。

【伝来】

「林家伝家図書」の印が、第一冊首にあり。

林家第四代・林榴岡の蔵書印 (前掲22『楽書』を参照)。

「林氏／蔵書」の印が、毎冊首 (第四〇冊を除く) 及び「音義序」の首にあり。

林羅山から昌平坂学問所の開校に至るまで、林家が収集した書籍に捺した蔵書印 (前掲34『古今韻会舉要』を参照)。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、每表紙 (第五・六冊を除く)・毎冊尾 (第三九冊を除く) にあり。

「大学校／図書／之印」の印が、毎冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

「内閣文庫」の印が、第一・二・一九・三七・四〇冊首、第一・二・一九・三七・四〇冊尾にあり。

【刊行年代】

補刊記は、前掲43『晋書』と同じであるが、「嘉靖三十七年」に補刊された頁が、前掲43『晋書』及び後述45『晋書』よりも多いため、より時代の下ったものと考えられる。

●元刊 (明嘉靖三七修) : 当館目録、六一頁。

●元刊 元大徳九路本 (集慶路) 明嘉靖三十七年修

…「宋元版所在目録」、六四頁。

●元浙刊本至嘉靖三十七年通修 : 『正史宋元版の研究』、三七五頁。

45 晋書 一三〇巻 音義三巻

四〇冊 (唐) 房喬等奉勅撰 何超音義
渋江抽斎旧蔵〔請求番号別〇二四—〇〇〇一〕

『晋書』については、前掲40『晋書』を参照。
『音義』については、前掲41『晋書』を参照。

【伝来】

「弘前医官渋／江氏蔵書記」の印が、毎冊首にあり。

「三寿山房」の印が、第四〇冊尾にあり。

上記の二印は、渋江抽斎の蔵書印。渋江抽斎 (一八〇五—一八五八) は、江戸時代後期の医者・儒学者・書誌学者。名は全善、抽斎はその号。津軽藩の藩医の家系に生まれ、医業のかたわら儒学・書誌学を学び、『経籍訪古志』の編纂に参与した。また、蔵書数は三万五千部に及ぶといわれた蔵書家でもあり、武鑑 (大名・幕府役人の名鑑) の収集は『江戸鑑図目録』の編者という形に結実した。森鷗外の『渋江抽斎』によって、彼の名は広く知られた。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

「田■嘗看此書大概」の不明印が、第一冊首にあり。

「■堂■蔵記」(白文)の不明印が、毎冊首にあり。

「■堂儲蔵記」の不明印が、毎冊首にあり。

また、天保五年 (一八三四) 「源孝善」による跋文を第四〇冊尾に附し、

「柳ノ口」(白文)、「学」ノ之印、「字ノ志述」の印を捺す。

【刊行年代】

補刊記は、前掲43・44『晋書』と同じであるが、「嘉靖三十七年」補刊の頁が前掲43『晋書』よりも多く、前掲44『晋書』よりも少ない。本書の刊行年代は、前掲43・44の中間に位置するものと考えられる。

●元刊(明嘉靖三七修)：当館目録、六一頁。

●元槧明修本：『経籍訪古志』、五二頁。

●元刊元大徳九路本(集慶路)明嘉靖三十七年修

：「宋元版所在目録」、六四頁。

●元浙刊本至嘉靖三十七年通修：『正史宋元版の研究』、三七四頁。

46 晋書 一三〇巻 音義三巻

二四冊(唐)房喬等奉勅撰 何超音義

林羅山旧蔵〔請求番号二八〇—〇二五〕

『晋書』については、前掲40『晋書』を参照。

『音義』については、前掲41『晋書』を参照。

【伝来】

「江雲涓樹」の印が、第一三冊首(巻一の巻首)の右下部にあり。

林羅山の蔵書印(前掲34『古今韻会举要』を参照)。

※本来第一冊目首にあるはずの「江雲涓樹」の印が、第一三冊首にあることから分かるように本書の冊次には乱れがある。

「林氏ノ蔵書」の印が、毎冊首にあり。

林羅山から昌平坂学問所の開校に至るまで、林家が収集した書籍に捺した蔵書印(前掲34『古今韻会举要』を参照)。

当館所蔵漢籍の「宋版」及び「元版」の改題②

「昌平坂ノ学問所」(墨)の印が、每表紙、毎冊尾にあり。

「大学ノ蔵書」の印が、毎冊首にあり。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあり。

本書は、林羅山の手沢本であることはもちろんのこと、林家において代々読み継がれてきたという点で重要なものである。まず、林家第二代・林鷲峯(二六一八—一六八〇)による朱点・朱引が目を引く。全巻にわたって朱点・朱引が施され、各巻末に校了の識語があり、第一九冊末(『音義』末)には跋文を附す。また、第五代・林鳳谷(一七二二—一七七三)と、その息子の龍潭による校訂も施されている。このように何代にもわたって林家で読み継がれてきた本書は、林家の学問を知るうえで貴重な資料といえよう。

【刊行年代】

前掲43・44・45『晋書』の補刊記に、さらに「万曆一〇年」(一五八二)が加わることから、前掲書より時代の下ったものと考えられる。

●元刊(明万曆一〇修)：当館目録、六一頁。

●元刊元大徳九路本(集慶路)明万曆一〇年修

：「宋元版所在目録」、六四頁。

●元浙刊本至万曆一〇年通修：『正史宋元版の研究』、三七六頁。

47 晋書 一三〇巻 音義三巻

三〇冊(唐)房喬等奉勅撰 何超音義

紅葉山文庫旧蔵〔請求番号史〇〇二—〇〇〇一〕

『晋書』については、前掲40『晋書』を参照。

『音義』については、前掲41『晋書』を参照。

【伝来】

「秘閣／図書／之章」(甲)の印が、毎冊首にあり。

「秘閣／図書／之章」(乙)の印が、第七冊首にあり。

※第七冊首は、甲・乙の二印を捺す。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首、毎冊尾にあり。

本書は万暦時代の補修が多く、これまでに取りあげた『晋書』よりも版本としては劣る。しかし万暦の補修によって、磨滅して読めなくなった文字が減り、「読みやすさ」という点では、他の『晋書』よりも優れている。

【刊行年代】

補刊記は、前掲46『晋書』に同じ。

●元刊(明万暦一〇修)：当館目録、六一頁。

●元刊元大徳九路本(集慶路)明万暦一〇年修

：「宋元版所在目録」、六四頁。

●元浙刊本至万暦一〇年通修：『正史宋元版の研究』、三七七頁。

(公文書研究員)